

和太鼓を用いたリズムづくりの試み

岡 林 典 子
(児童学科教授)

佐 野 仁 美
(京都橘大学)

坂 井 康 子
(甲南女子大学)

山 崎 菜 央
(附属小学校教諭)

本研究では、和太鼓を用いてリズム創作を試みた小学校第4学年の音楽科授業を、授業の様子とワークシート、振り返りシートをもとに検証し、活動における創造的な学びと協働的な学びを考察した。その結果、和太鼓の演奏経験が児童たちに音色や強弱、奏法などの工夫をもたらし、実感を伴った生きた形でリズムづくりがなされ、創造的な学びが深められていた。また活動において協働的な学びがうまく作用していた。

キーワード：協働性、創造性、和楽器、小学校音楽科、小学校第4学年

1. はじめに

1.1 研究の背景

平成29年告示の幼稚園教育要領、保育所保育指針等では、領域「環境」の「内容」(6)に「日常生活の中で、我が国や地域社会における様々な文化や伝統に親しむ」の項目が新たに加えられ、「内容の取扱い」には「我が国の文化や伝統的な行事」「わらべうたや我が国の伝統的な遊び」などの文言が並び、日本文化との関わりに意識が向けられるようになった。また、領域「言葉」では「内容の取扱い」に(4)「幼児が生活の中で、言葉の響きやリズム、新しい言葉や表現などに触れ、これらを使う楽しさを味わえるようにすること」という項目が加わり、幼児期から日本語の音感覚を育むことにも目が向けられるようになった¹⁾。領域「表現」においては新規に「内容の取扱い」において「風の音や雨の音…(中略)自然の中にある音に気付く」という留意事項が含まれることとなった。音楽表現に関する「内容」は変わらず、(6)「音楽に親しみ、歌を歌ったり、簡単なリズム楽器を使ったりなどする楽しさを味わう」が挙げられ

ているが、改訂前も改訂後も「どんな音楽」か、「どんな歌」か、「どんなリズム楽器を用いるのか」などの示唆はされておらず、教師(保育教諭・保育士)に委ねられている。

現状の幼児教育・保育を概観すると、「簡単なリズム楽器」としてはカスタネット、トライアングル、タンブリン、すずなどが一般的に用いられているが、生涯にわたる音楽的素地を形成する乳幼児期の子どもにとって、どのような「音楽」やどのような「楽器」が最適であるのかが十分に議論されているといえるだろうか。細田(1995)は、タンブリンを一例として、子どもにふさわしい楽器について「どんなリズムが叩けるか、こういうリズムを覚えるにはどんな練習をしたらよいか」ということに注意を向けるのではなく、曲に合わせて踊ったり、動きながら叩いたり、子どもがその楽器を手にした時に楽しく感じて表現できるように、楽器遊びについて見直すべきだと問題提起をしている²⁾。このほかにも、リズム楽器の指導形態のあり方に関する乙部(2015)の研究³⁾や、楽器と関わる2歳児の様

子を捉えた石川・村上（2017）らの研究⁴⁾、リズム楽器を活用した入江（2020）⁵⁾や望月・山本（2021）らの研究⁶⁾がみられるが、子どもの音楽的素地形成にふさわしい楽器に関した言及はなされていない。

一方、平成29年告示の『小学校学習指導要領解説 音楽編』には改訂の基本的な考え方として「生活や社会の中の音や音楽の働きについて意識を深める学習の充実を図る」「和楽器を含む我が国や郷土の音楽の学習を図る」などが明示された。これらの考え方に沿った具体的な学習内容の改善点の1つとして、これまで第5学年及び第6学年において取り上げられてきた和楽器が、第3学年及び第4学年に引き下げられたことが挙げられる⁷⁾。

筆者らは「幼少期から自国の音・音楽を感じる」「日本語に基づく表現を体得する」という考え方と方法論を基盤として、和楽器を用いた幼小連携の視点からの研究を進めている⁸⁾。本研究では和太鼓を用いてリズム創作を試みた小学校第4学年の音楽科授業について検証する。

1.2 研究の経緯

本研究に先立ち、本稿に至るまでの我々の研究、および関連する研究について触れておく。

筆者らは、幼稚園や子ども園の保育者および小学校教諭の協力のもと、これまで10年以上にわたり継続して創造性と協同性を培うことができる様々な表現遊びと音楽科授業のプログラムを開発してきた。岡林の「幼小の接続と協同性をテーマとした研究」⁹⁾と佐野の「表現遊びから音楽づくりへつながら創造性を重視した研究」¹⁰⁾を複合的に実現するべく、実践を繰り返しては修正を加え、体系化したプログラムを構築しようとしてきた。坂井は、子どもの音声についての音響的分析をおこなうなどにより、岡林・佐野による研究を根拠のあるものとするために基礎研究を積み重ねてきた¹¹⁾。

筆者らは、幼児期からのわらべうたや地域の祭り囃子に用いられる和楽器に親しむ体験を、小学校音楽科でのお囃子づくりに発展させる

等、素地形成からの活動に連続性を持たせることの重要性を感じている。これらは日本的な音感を重視した創作活動を生み出す基礎の育成にも寄与するものである。また、急速に国際化が進む現在、将来を担う子どもたちが自国の文化に親しむことによるアイデンティティの構築にも繋がる事が期待できる。

これまでの共同研究において、筆者らは日本の子どもの音楽的素地を育成するためには、日本語、かけ声、オノマトペ、和楽器などを用いた系統性のある音楽活動プログラムが必要であることを見出し、具体的な指導案を考案して幼稚園・子ども園と小学校での実践を繰り返して検討を重ねてきた¹²⁾。

本研究と関連する実践については、小島ら（2014）があり、日本民謡やわらべうたに基礎を置く音楽づくりの実践が記されている¹³⁾。これらを踏まえつつ、本稿では昨年度に小学校第3学年に和太鼓を用いて試みた音楽づくりの授業に続き、第4学年に進級した同じ児童を対象として「和太鼓を用いたリズムづくり」を行った授業を分析し、筆者らの目的とする創造性と協働性（協同性）がどのように育まれているかを検討し、考察する。

2. 教科書にみられる和楽器を用いた教材

ここでは、教育芸術社の小学校教科書にみられる、和楽器の教材について取り上げる。和楽器が初めて出現するのは第2学年の音楽づくりである。和太鼓のイラストとともに、「おまつりの音楽」として、ドンドコ、ドンドン、ドン（ウン）、ドコドン、（ス）コドン、ドコドコといった2拍分のリズムカードを選び、音楽の仕組みとしては繰り返しを用いたリズムづくりの教材が掲載されている¹⁴⁾。第1学年では歌に合わせて手拍子やカスタネットでリズムを打つ教材で、「たんたん | たんうん」のような言葉が多用されているが¹⁵⁾、第2学年では口唱歌（教科書では唱歌と記載されているが本稿では口唱歌で統一する）を用いることにより、和太鼓ならではの重量感や音色を感じとってリズムをつくらることができるだろう。

この「おまつりの音楽」の音楽づくりが展開されるのが第3学年である。第3学年では「ちいきにつたわる音楽でつながろう」の鑑賞教材として、祇園囃子、ねぶた囃子、神田囃子等が取り上げられ、たいこ、ふえ、かねが紹介される。神田囃子では「投げ合い」の口唱歌（締太鼓の楽譜）が掲載され、リズムを口唱歌で歌ったり打ったりする。その後、打ち方とともに締太鼓では「テンテンテン（ウン） | テンテケテン（ウン）」、長胴太鼓では「ドンドンドン（ウン） | ドンドコドン（ウン）」のような口唱歌が掲載されて太鼓を演奏する教材、さらにラドレの三つの音でお囃子の旋律作りの教材へと発展させる。このように「地域の音楽」に目を向ける題材が、鑑賞教材から口唱歌、楽器の演奏、さらにリコーダーを用いたお囃子の旋律づくりへとつながっていき、伝統から創造へと発展していることが分る¹⁶⁾。

郷土の音楽を取り上げる教材は第4学年でも見られ、《こきりこ》のような民謡の鑑賞と歌唱から、地域に伝わる音楽の調べ学習へと進み、日本の民謡や郷土芸能が紹介される。ここでは伝統を継承する次世代の担い手の育成までを視野に入れている¹⁷⁾。その一方で、箏の曲である藤井凡大《箏独奏による主題と6つの変奏「さくら」》や三味線《津軽じょんがら節》、三線《ていんさぐぬ花》の鑑賞の後、箏で《さくらさくら》を弾く教材が掲載されている。箏の活動はさらにミソラドレの5つの音によるリコーダーを用いた旋律づくりへとつながっている¹⁸⁾。

この傾向は第5学年でも見られ、箏と尺八の音色や旋律の美しさを感じ取る《春の海》の鑑賞、《子もり歌》の歌唱と《ソーラン節》《かりばし切り歌》の鑑賞から日本の音楽の特徴を感じ取る活動、さらにミファラシドミの5音音階による旋律づくりへと発展させる¹⁹⁾。この活動ではキーボードやリコーダー、箏を使い、各自でつくった旋律をつなげ、最後に核音を用いた繰り返しの旋律をつくって、重ねたりというような音楽の仕組みや構成へ意識を向けることが目されている。第6学年では歌唱教材《越天楽今様》から雅楽《越天楽》の鑑賞へと日本の

伝統音楽を学習し、そこから世界の国々の音楽の鑑賞へと広がっていく²⁰⁾。

以上のように、教育芸術社の小学校の教科書に掲載された教材からは、演奏する楽器として和太鼓と箏が用いられていること、また鑑賞と演奏、そして音楽づくりという伝統音楽を理解し、それを創造的な活動へとつなげる一連の活動が見られることが分る。

3. 研究の目的・方法と実践の計画

3.1 研究目的

本実践では、和太鼓を用いて試みるリズムづくりを通して、小学校第4学年の児童たちに創造性と協働性がどのように育まれているかを、実践の様子から考察することを目的とする。

3.2 研究方法

第4学年の授業を全2時間で行う。

＜研究対象＞ A 小学校第4学年2クラス 81 名
＜実践日＞ 第1時は2022年3月7日、第2時は3月9日

＜手続き＞

全2時間で構成された授業の様子をビデオカメラ3台で、3方向から動画で撮影するとともに、写真と筆記による記録も加えた。これらの録画資料、写真、授業で配布するワークシートと振り返りシートに記入された内容をもとに分析・考察を進める。

＜分析・考察の視点＞

授業での児童たちの様子と、動画データ、ワークシートと振り返りシートに記入されたリズムフレーズや感想をもとに、創造性と協働性がどのように育まれたかを検討する。また、同様のデータをもとに、和太鼓を用いた音楽づくりにおいて、児童たちがどのような気づきを得たのか、どのような思いで音楽を作ろうとしたり、音を奏でようとしていたのかという視点から分析・考察する。

3.3 授業の準備：教材について

児童たちが口唱歌を唱えて和太鼓の音色の違いやリズムのまとまりを感じ取って演奏するた

めには、どのような教材をつくるのが良いかと岡林、佐野、坂井、山崎の4名で話し合った結果、岡林が和太鼓教室で指導を受けた《ドンドン打ってけ!》(小笠原めぐみ・佐藤秀嗣:作曲/中条きこの編曲)から一部を抜粋して繋げたものを和太鼓の教材とした(図1参照)。また、リズム創作のためのワークシート(図2参照)

《ドンドン打ってけ!》

天テケ / 天テケ / 天テケ / 天テケ (地打ち 韓太鼓) 一部抜粋

【第1フレーズ】

どん	どん	打っ	てけ	どん	どん	打っ	てけ
(右手)	(左手)	両腕を上げる	(右×左)	(右手)	(左手)	両腕を上げる	(右×左)

どん	どん	打っ	てけ	ドコ	ンコ	ドン	(ハッ)
(右手)	(左手)	両腕を上げる	(右×左)	(右×左)	(左)	(右手)	両腕を上げる

※これを2回繰り返す

【第2フレーズ】

ド	ー	ー	ン	ド	ー	ー	ン
両腕をゆっくり上げていく				両腕をゆっくり上げていく			

ドン	ハッ	ドン	ハッ	ドン	ドン	ドン	ドン
(右手)		(左手)		(右手)	(左手)	(右手)	(左手)

【第3フレーズ】

ドコ	ドコ	ドコ	ドコ	ドコ	ドコ	ドコ	ドコ
(右×左)	(右×左)	(右×左)	(右×左)	(右×左)	(右×左)	(右×左)	(右×左)

スッ	トコ	スッ	トコ	スッ	トコ	スッ	トコ
	(右×左)		(右×左)		(右×左)		(右×左)

※「ドコ」と「トコ」の違いは、強弱の違いです。

【第4フレーズ】

トコ	うん	それ	それ	トコ	うん	それ	それ
		腕を開きながら回す				腕を開きながら回す	
(右×左)	両腕を交差させる			(右×左)	両腕を交差させる		

ドン	うん	ドン	うん	ドン	うん	ヤ	ー
						ポーズを決める!	
(両手)		(両手)		(両手)			

図1 教材とした《ドンドン打ってけ!》の楽譜

と、児童が授業からどのようなことを感じたのか、太鼓を打つにあたりどのような工夫を試みたのかを知るために、振り返りのシートを作成した(図3参照)。《ドンドン打ってけ!》は口唱歌が覚えやすく、かけ声や動きを伴った楽しい曲である。

第1回宿題ワークシート 年 組 番 / 名前

★宿題
下の音符や休符、リズムを色々と組み合わせて、自分だけのリズムフレーズをつくってみよう。

ドン

トコ(弱い)

ドコ(強い)

トコ(強い)

カッ

(わく打ち)

カカ

(わく打ち)

・うん
・スッ

・ハッ
・ツレ

ドコ

ンコ

スッ

トコ

ドー

ーン

【自分だけのオリジナルリズムフレーズを作ろう!】

♥♥♥♥♥♥♥♥

--	--	--	--	--	--	--	--

♥♥♥♥♥♥♥♥

--	--	--	--	--	--	--	--

・リズムフレーズができたら、口唱歌を歌ってみよう。
・口唱歌を覚えたら、歌いながら両手を動かしてみよう。

図2 リズムづくりのワークシート

《和だいこ》合そうのふりかえり

年 組 名前:

【和だいこを学習してどんなことを感じましたか】

【くふうしたところ】

【おもしろかったところ・楽しかったところ】

【むずかしかったところ】

図3 振り返りシート

3.4 授業計画について

3.4.1 対象児童について

今回の実践対象である第4学年の約半数が内部進学であり、幼稚園在園時には筆者らと和楽器の音を聴く経験をしている。また、第1学年、第2学年時には筆者らとともに祇園囃子を題材とした授業で和楽器に触れた経験がある。さらに第3学年時には、「和太鼓の打ち方を知り、音を出して楽しむ」ことをねらいとして、8拍で4種類のリズムパターンから2つを選んで繋げるという課題に取り組み、和太鼓の演奏を体験している。

3.4.2 授業計画にあたっての工夫点

全2時間の授業内容と進行については、岡林と佐野が中心となって計画を練り、授業実践者の山崎と綿密に打ち合わせた。その内容を以下の表1と表2にまとめた。また、授業を進める上で試みた工夫は、次の4点である。

- 1) モデル演奏について、昨年度は山崎と岡林・佐野の3名で行ったが、今回は岡林ゼミの5名の学生が《ドンドン打ってけ!》のモデル演奏を行った。
- 2) 初回の授業を行う前に、5名の学生および山崎・佐野・岡林は大学の校舎で太鼓の講師より2時間にわたる和太鼓の出張レッスンを受け、太鼓の打ち方や強弱の付け方などを学んだ。
- 3) 口唱歌に慣れるために、子どもたちは和太鼓の授業を行う3週間前から、《ドンドン打ってけ!》の口唱歌を覚え始めた。
- 4) 第2時のグループ発表時の隊形をきめ細かく計画した。教室の前方に発表者6～7名が並び、向き合う後方の位置に別グループから2名が出て、つなぎの部分(《ドンドン打ってけ!》の第1フレーズ)を打つ。また、発表者以外の児童はつなぎの部分の口唱歌を声を合わせて唱え合い、クラス全体でリズムを共有できるようにした。

表1 第1時の授業計画

題材名	和太鼓の口唱歌に触れ、合奏の楽しさを味わおう
題材の目標	・3年生に続いて、和太鼓の口唱歌に触れる ・和太鼓の音を友だちと合わせて、演奏を楽しむ
第1時の計画内容	・授業の1週間前から《ドンドン打ってけ!》の口唱歌を覚える。 ①教師と大学生の《ドンドン打ってけ!》の範奏を聴き、和太鼓の音の響きを感じる。 ②左右の手の使い方や打ち方を知る。 ③全員で口唱歌を唱える。 ④両手に撥を持ち、口唱歌を唱えながら素振りをする。 ⑤グループごとに交代で《ドンドン打ってけ!》の口唱歌とともに和太鼓を打つ。 ⑥宿題として、ワークシートにオリジナルのリズムフレーズを作ってくる。

表2 第2時の授業計画

題材名	自分だけのリズムフレーズを作り、グループの仲間と協働して演奏を楽しもう
題材の目標	・リズムを組み合わせてフレーズを作る ・拍の流れにのって友だちと演奏を楽しむ ・かけ声、動き、強弱、反復などの音楽的要素に気づき、演奏に取り入れる
第2時の計画内容	①グループに分かれ、メンバーのそれぞれが作ってきたリズムフレーズをグループ内で発表し、つなげる順番を決める。 ②フレーズのつなぎとして《ドンドン打ってけ!》の第1フレーズを入れ、それぞれが作ったフレーズをつなげて口唱歌と動きで練習する。 ③できたグループから和太鼓で練習する。 ④グループごとに発表する。

4. 授業の様子

4.1 第1時の様子

第1時では、導入として学生たちが《ドンドン打ってけ!》の範奏を行った。5台の長胴太鼓が並べられ、山崎の打つ締め太鼓の地打ちのリズム (J ♪) を支えにして演奏が始まると、子どもたちは真剣な表情で学生が太鼓を打つ動きに見入っていた (図4参照)。



図4 学生による模範演奏

3週間前から口唱歌と手の動きを練習してきた子どもたちは、曲のリズムと動きをしっかり習得しており、学生の2回目の範奏では口唱歌を唱え、動きを合わせて素振りをしていた。次に、5～6人ずつ実際に太鼓を打ち始めるが、初めは不安そうな表情で腕の動きも小さく、音も響かない状況であった。しかし、学生にアドバイスを受けながら、何度もローテーションして練習を重ねていくと、力を抜いた動きで太鼓の音も響き始めた。子どもたちはリラックスした表情になり、かけ声をかけたり、大きく素振りをしながら順番を待つ姿も見られ、全員が太鼓のリズムを共有していた（図5参照）。



図5 学生のアドバイスを受ける児童

太鼓演奏が一段落したところで、次回の課題であるリズムづくりのワークシートが配られ、オリジナルのリズムフレーズを作ってくることと、枠うちの口唱歌「カッ」「カカ」という打法が説明された。

4.2 第2時の様子

第2時では、6～7人ずつで6つのグループ

を作り、宿題に出されていたリズムフレーズをグループでつなげて、一つの曲としてまとめることにした。子どもたちはグループ演奏のルールをすぐに理解し、順調に話し合いを進め、練習に取り組んでいた（図6参照）。発表では、曲の始まりと、一人ひとりのリズムの間に、必ず《ドンドン打ってけ！》の第一フレーズをつなぎとして入れることにして、2名の児童が発表者の後方で打つようにした。多くの児童がこの役を希望していた。どの児童もグループの発表の様子をくみ取って、リズムを合わせたり、ときにはリードをして、クラス全体でリズムを共有して楽しむ様子がみられた（図7、8参照）。



図6 グループで話し合う



図7 創作したリズムをつないで発表する



図8 発表グループのリズムを全員で共有する

4.3 授業実践者の感想

授業実践者である山崎は、授業の感想を表4のようにまとめている。第1時では、大学生の

表4 授業実践者の感想

模範演奏や打ち方のサポートが効果的に作用していたことや（表4-①②）、前もって口唱歌を覚えるようにしたことが、スムーズな進行につながったようである（③）。子どもたちが和太鼓特有の力強い音や振動を感じ取っていたことや、リズムにのってかけ声やポーズをうまく表現していたことへの評価も認められる（④⑤⑩）。また、発表者と向かい合う2名の児童が、発表するグループ毎のリズムフレーズをスムーズにつなぐために、つなぎの部分でリズムを合わせたり、リードすることができていたことも評価されている（⑪）。

一方、バチの持ち方や奏法についての指導の不十分さや、音楽的なつながりを考えて順番を決めるまでには至らなかったことについて、実践者に課題意識が生まれている（⑥⑫）。全体的にみると、今回の活動は肯定的に受け止められたことが窺える。

5. 結果と考察

子どもたちのリズムづくりの作品について、まとめてみたい。宿題として出されたワークシートの音符や休符を組み合わせたリズムカードには、第1時に演奏した《どんどん打ってけ！》を構成しているリズムが多く含まれていた。他方、《どんどん打ってけ！》に入っていなかった「カッ」「カカ」には、どちらも（枠打ち）と記され（p.126 図2 参照）、教諭（山崎）が子どもたちに口唱歌とともに枠を打つことを説明し、子どもたちは興味深く聞いていた。また、「ドコ」（強い）、「トコ」（弱い）のように同じリズムでも、強弱の違いにより、口唱歌が異なることも示されている。

子どもたちの作品を見ると、「ドンドン」「ドコンコ」「ストコ」など、《どんどん打ってけ！》に用いられていたリズムが多い。おそらく、この曲を子どもたちが楽しんで演奏したことにより、子どもたちはこれらのリズムを体感し、口唱歌を通して記憶しており、それがリズムづくりで出現したことと思われる。

■第1時

- ①大学生による演奏が、子どもたちにとって印象的なものとなった。
- ②傍で大学生のサポートがあったので、子どもたちは心強かったようだった。
- ③事前に口唱歌を練習していたので、すぐに和太鼓演奏に入ることができた。不安げな様子も見られたが、繰り返し友達の演奏を聴き、練習回数が増えると技術の向上がみられた。
- ④かけ声をリードしてくれる児童がいたので、だんだんかけ声を発する児童が増えて、仕上がりがいよものになった。
- ⑤和太鼓を実際に叩き、力強い音を聴いたり、床からの振動を感じたりすることができ、よい体験になった。
- ⑥和太鼓を大いに楽しむことはできたが、バチの持ち方や腕を上まであげるなどの奏法についての指導が十分にできなかった。

■第2時

- ⑦リズム創作の課題に熱心に取り組んでいた
- ⑧グループ演奏の仕組みをすぐに理解し、順調に練習に取り組むことができた。
- ⑨一台の太鼓を6人で演奏させたが、拍ののってうまく練習できていた。
- ⑩どのグループも次へのつなぎがスムーズで、かけ声やポーズにも工夫があった。
- ⑪教室の後方に2台和太鼓を置くと、つなぎ部分を打つ役の希望者が多くおり、グループの発表の様子をくみ取って、リズムを合わせたり、ときにはリードすることができていた。
- ⑫グループ内の演奏の順番を名簿順やジャンケンで決めており、リズムに踏み込んで音楽的に考えることができたグループは少なかった。

その一方で、「カッ」「カカ」のリズムは《どんどん打ってけ！》には用いられていなかったが、「カッカカ」「ドンカッ」「カカカカ」「ドンカカ」「ドンカッ」のように子どもたちの作品には散見される（巻末資料A）。枠打ちをするという教諭の言葉から、子どもたちはたたく場所と音色の関係について興味を持つようになった。「たいこのふちをたたくと、カッカッと音がして、その音をリズムに入れて楽しかったです」という子どもの言葉からもそれは窺える。

また「ドコドコ」「トコトコ」「ストコ」な

どに強弱を記入したり（巻末資料B）、左右の指示が入っていたりする（巻末資料C）など、子どもたちは《どんどん打ってけ！》を和太鼓で演奏したことによる学びを得ていた。以上のように、今回の実践は、単にリズムカードを並べて作る活動とは異なり、和太鼓の演奏の経験が、実感を伴い、強弱や奏法にも工夫された、いわば生きた形でのリズムづくりに反映されていたと言えるだろう。

さらに、子どもたちの作品には、「ドコンコドンドン | ドコンコドンドン | ドーンカカ | ドーンカカ」のように完全に反復で構成されたもの、「ドンカカドンカ | ドコンコドンカ」のように一部を反復したものが見られた。既成の曲のリズムフレーズには必ず反復が含まれる訳で、構成の面からも手本となった楽曲を演奏した経験が生きていると言えるだろう。そして、口唱歌は音色や強弱といった情報を知らせるだけでなく、音楽の構成をわかりやすくする役目も果たしたと考えられる。

子どもたちの感想からは、「難しかったけど、自分でフレーズを作るのは楽しかったです」「とくに2回目は自分のリズムだったので、やりやすかったです」「自分だけのリズムを作り、グループのみんなでテンポよくつなげられたことが一番うれしかった」「和太鼓をするために声でやったりして、面白かった」といった記述が見られ、和太鼓演奏の発展として、口唱歌を用いたリズムづくりの活動が子どもたちにとっても楽しく、自分のリズムをつくるという意味で非常に有意義であったことが窺える。

また、「みんなと協力してたたくことができて楽しかった」「班で発表したのが面白かった」などの感想からは、この活動において協働的な学びがうまく作用していたと言えるだろう。

6. 今後に向けて

本稿では、和太鼓を用いた音楽づくりのプログラムを通して、小学校第4学年の児童たちに育まれる創造性と協働性について、授業のワークシートと振り返りシートの内容をもとに検証を進めた。また、和太鼓を用いた音楽づくりに

おいて、児童がどのような気づきを得たのか、さらに、どのような思いでリズムパターンをつなげて音楽を作ろうしたのかを考察した。

筆者らは対象児たちと幼稚園年長時から関わりをもち、5年が過ぎた。児童たちは初めのうちは1年ぶりに和太鼓を打つことを不安そうにしていたが、次第に和楽器を前にして主体的かつ意欲的に表現活動に取り組んでいった。この度の実践が、我々が目指している乳幼児期からの音楽的素地づくりとして、対象児童に根づいてほしいと願い、今後も地道に研究を継続していきたい。

註

- ①文部科学省『幼稚園教育要領(平成29年告示)』フレーベル館 2017 4月②厚生労働省『保育所保育指針(平成29年告示)』フレーベル館 2017 4月
- 細田淳子(1995)「幼児にふさわしいリズム楽器－タンブリンを一例として－」日本保育学会大会研究論文集 1995 356-357
- 乙部はるひ「領域『表現』におけるリズム楽器活動のあり方－指導形態の違う2保育園の比較より－」帝京平成大学紀要 第26号第2号 2015 219-228
- 石川眞佐江・村上康子「2歳児の楽器遊びにおけるモノとのかかわりの特徴－楽器へのアプローチの違いに着目して」音楽教育ジャーナル vol.15 2017 104-112
- 入江真理「保育におけるリズム楽器の活用に関する研究(2)－保育者がとらえた「子どもがリズム楽器で楽しんでいた活動」場面の分析から－」環境と経営：静岡産業大学論集 第26号第2号 2020 25-36
- 望月たけ美・山本華子「教育楽器を用いた『合奏劇』の教材性に関する研究－幼小連携の観点から－」常葉大学教育学部紀要 第41号 2021 237-255
- 文部科学省『小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 音楽編』2018 2月
- 岡林典子・佐野仁美・坂井康子ほか「協働的な学びを育む音楽づくりの試み－和太鼓を用いた小学3年生の授業から－」京都女子大学発達教育学部紀要 第18号 2022 121-130
- 「幼小連携をふまえた音楽教育プログラムの開発」科研課題番号:25381279(研究代表者) / 「協同性の育ちに着目した幼小接続における音楽教育のプログラム開発」科研課題番号:17K04889(研究代表者)
- 「表現遊びから音楽づくり、創作へと体系化された音楽教育プログラムの開発」科研課題番号:

- 21K02478（研究代表者）
- 11) 「保育士・教員養成における音声・歌唱教育に資する乳幼児音声の分析的研究」 科研課題番号：22530891（研究代表者）／「保育士・教員養成における歌唱教育に資する子どもの自発的歌唱に関する研究」 科研課題番号：25381104（研究代表者）／「『声・ことば・うた』の音響的・韻律的分析に基づく保育・教育の表現活動の研究」 科研課題番号：17K04655（研究代表者）
- 12) 岡林他（2017、2018、2019、2021a、2021b）、佐野他（2016、2017、2018）、坂井他（2016）、坂井他（2017、2022）、山野他（2018）など
- 13) 小島律子・関西音楽教育実践研究会編『生活感情を表現するうたづくり－理論と実践』2014 黎明書房
- 14) 小原光一他『小学生の音楽 2』教育芸術社 2020 40-41
- 15) 小原光一他『小学生の音楽 1』教育芸術社 2020 15,19,21,23,25
- 16) 小原光一他『小学生の音楽 3』教育芸術社 2020 58-65
- 17) 小原光一他『小学生の音楽 4』教育芸術社 2020 26-31
- 18) 同書、56-61
- 19) 小原光一他『小学生の音楽 5』教育芸術社 2020 52-59

20) 小原光一他『小学生の音楽 6』教育芸術社、2020 48-51

付記

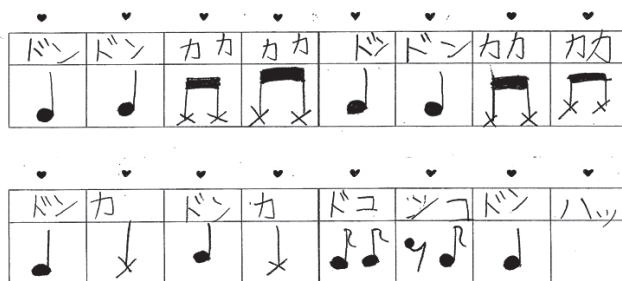
本稿は岡林が全体構成を行った。執筆担当は1章（岡林・坂井）、2章と5章（佐野）、3章と6章（岡林）、4章（岡林・山崎）である。

謝辞

本研究に当たり、附属小学校の児童の皆さんにご協力いただきました。記して深くお礼を申し上げます。

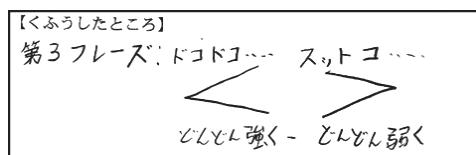
※本研究はJSPS（課題番号17K04889 代表者：岡林典子「協同性の育ちに着目した幼小接続における音楽教育のプログラム開発」／課題番号21K02478 代表者：佐野仁美「表現遊びから音楽づくり、創作へと体系化された音楽教育プログラムの開発」／課題番号17K04655 代表者坂井康子「『声・ことば・うた』の音響的・韻律的分析に基づく保育・教育の表現活動の研究」）の助成を受けている。

巻末資料 A 「カカ」を用いた作品



・リズムフレーズができたら、口唱歌を歌ってみよう。

巻末資料 B 「強弱」に関する振り返りシートの記述



巻末資料 C 「左右の指示」の入った作品

